

修平科技大學
應用日語系

題目：桶狭間の戦いについて

指導教師：古瀬和彦老師

姓名：賴一樟 學號：BX105504

中華民國 108 年 6 月 10 日

摘要(中文)

戰國大名今川義元上洛之際因大意而被織田信長重山上下來襲擊，這個廣為人知的通說，根據近幾年研究家們所研究出來的資料漸漸的可信度越來越低了。

摘要(日文)

戦国時代大大名の今川義元は上洛の途中で油断したため当時まだ小大名の織田信長に山から急襲され討ち取られた。この通説は近年研究者たちの研究によって段々弱くなってきた。

目次

目的	5
第一章 小豆坂の戦いとこのあとの織田と今川	6
第二章 今川義元が桶狭間の戦いで率いた兵の数	7
第三章 信長出陣までの義元の動き	10
第四章 信長の出陣	11
第五章 信長出陣時の義元の動き	13
第六章 義元、桶狭間の陣は山か谷か	14
第七章 桶狭間の戦い、そして義元の最期	15
第八章 結論	19
参考文献	20

目的：

戦国時代、大大名の今川義元は大軍を率いて上洛の途中に油断して当時、まだ小大名の織田信長に山から襲撃され、討ち取られた。

これはよく小説やテレビのドラマやゲームなどに出てくる場面である、この通説は近年研究者たちによって、段々弱くなってきた。

この卒論では弱くなった通説と研究者たちによる新しい説を比較検証し、可能性が高いものを探っていく。

(一) 小豆坂の戦いとこのあとの織田と今川

小豆坂の戦いは、岡崎城に近い三河国額田郡小豆坂で行われた合戦。三河側の今川氏と松平氏連合と尾張から侵攻してきた織田氏の間で天文十一年（1542年）と十七年（1548年）の二度に渡って繰り広げられた。

発端は松平氏家中の家督相続を巡る対立だが、これに領地を拡大を図る織田氏と今川氏が介入し、事実上、松平清康の死後勢力の衰えた松平氏に代わる西三河地方の覇権をめぐる、織田信秀（織田信長の父）と今川義元との間生じた抗争である。

(a) 第一次小豆坂の戦い

織田信秀（織田信長の父）の西三河平野部への進出に対し、松平氏を後援しつつ東三河から西三河へと勢力を伸ばしつつあった今川義元は、西三河から織田氏の勢力を駆逐すべく、天文十一年（1542年）八月（一説に十二月）大軍を率いて生田原に軍を進めた。

一方の織田信秀もこれに対して安祥城を発し、矢作川を渡って対岸の上和田に布陣。八月十日、両軍は岡崎城東南の小豆坂において激突した。

この戦いは、織田方の小豆坂の七本槍をはじめとした将士の奮戦によって織田軍の勝利に終わったとされる。しかしながら、この第一次合戦については虚構であると言う説もある。だからこの卒論では検証しない。

(b) 第二次小豆坂の戦い

天文十七年(1548年)三月信秀は岡崎城を武力で攻略することを目指し、庶長子信広を先鋒として兵を率いて安祥城から矢作川渡河、上和田に着陣した。今川義元と松平氏救援のため、太原雪斎を大将、朝比奈泰能を副将として出陣させた。十九日に織田軍先鋒の信広と接触し小豆坂で合戦となった。

(c) この戦い後の織田と今川

第二次合戦において今川氏・松平氏連合はを収めはしたが、この後の天文十七年（1548年）に松平広忠が家臣の手によって刺殺されしまい、松平氏の次期当主である竹千代（後の徳川家康）が織田氏のもとに人質として取られていたため、岡崎城は無主の状態になってしまった。

天文十八年（1549年）、太原雪斎は人質交換を狙い、十一月八日から九日にかけて今川軍と松平軍を率いて安祥城を攻略、信広を捕虜として、竹千代（後の徳川家康）と交換する交渉に成功した。

安祥城の失陥により織田氏の三河進出は挫折に終り、さらに天文二十年には織田信秀病没、後を続いた継いだ信長とその弟・信勝（後の織田信行）間で内紛が起こった。この結果、尾張・三河国境地帯における織田氏の勢力は動揺し、信秀の死と前後して鳴海城・笠寺城を守る山口氏が今川に投降し、逆に今川氏の勢力が尾張に食い込むこととなった。

やがて、弟との争いを乗り切った織田信長は尾張の統一を進めて力をつけ笠寺を奪還、さらに鳴海城の周辺に砦を築き、鳴海城に籠った今川方の武将・岡部元信を攻囲するに至る。これに対し、永禄3年（1560年）に今川義元は大軍をもって尾張へ侵攻した。鳴海城をはじめ孤立した今川方の勢力を救援し、国境地帯の争いを劣勢から巻き返そうとした。この戦役において勃発した合戦が桶狭間の戦いであり、主将義元を失った今川軍は三河から急速に勢力を後退させ、かわって松平元康（徳川家康）に率いられた松平氏が復興することになる。まもなく松平氏は織田氏と同盟（清洲同盟）を結んだため、長らく続いた尾張・三河国境地帯の争いは沈静化していった。

(二) 今川義元が桶狭間の戦いで率いた兵の数

今川義元が上洛する時、率いた兵の数は諸説あり、二万から六万以上とする説がある。しかし、六万という説では多すぎると見られているので、ここは検証の必要がないだろうと思う。

「信長公記」では、「御敵今川義元は、四万五千率し……」と記載されている。そして、当時「甲相駿」(甲斐・武田信玄、相模・北条氏康、駿河・今川義元)三国同盟の武田氏の資料「甲陽軍鑑」では「二万あまりの軍勢」とし、同じく同盟の北条氏の資料「北条五代記」では「二万五千」としている。

まず、「信長公記」に記載されている「四万五千」について述べる。

小和田哲男氏の論点では「四万五千」と言う数は、今川義元としては戦う前から相手を圧倒するため、わざと多い数を言った可能性もある。それと、信長方としてみれば、勝利したあと、いかに少ない数で大軍を破ったかを宣伝する必要上、ことに数を水増した可能性もある。したがって、実際のところは二万から二万五千の方が妥当である。

その論拠となるのは、近世の石高から動員兵力を計算する方法によって出てくる数が、ほぼそれと同じ程度の軍勢になることである。近世大名の一般的な数値では、一万石につき二百五十人の軍役ということである。

しかし、戦国時代の大名今川義元石高制ではないので、今川領国を近世の大名のように何万石という数字で表現するのは難しい。ただ、類推できる史料がある。

時代が少し下がるが、豊臣秀吉が全国的に行った「太閤検地」に基づいて「検地目録」と言うものが慶長三年(1598年)にできている。

それによると、関係する国々はづきのとおりである。

駿河	一五万石
遠江	二五万五千百六十石
三河	二九万七百十五石
尾張	五七万千七百三十七石

このうち、駿河、遠江と三河の三ヶ国は文句なく、今川の領国となっているが、尾張と言う国はどのように分配しているのが問題である。

仮に信長が二、義元が一。すなわち、尾張を三分にしたら、信長が三分の二、すなわち三八万石を持つ。義元が三分の一、一九万石を持つということになる。

そして、駿河、遠江と三河の三ヶ国と尾張の一部を合わせて、約八九万石となる。一万石につき二百五十人で計算すると、今川軍は最低でも二万二千人と言うことになり、普通に言われている二万五千人に近い。永禄三年（1560年）の時点で今川義元は、二万五千の大軍を率いたのは事実であったろうか。以上、小和田哲男の論点である。

私なりの考えでは、少し違う。私から見ると小和田哲男氏の論点では、義元全兵力は二万五千しか持ってないとしか見られない。確かに、全日本を巻き込んだあの関ヶ原の戦いでも東西両軍合わせて二十万ぐらい。しかし、全大名が全兵力を出すはずがない。当時、東軍に加担した黒田氏は関ヶ原に兵を出した。一方で九州を制圧している。

したがって、「甲相駿」三国同盟を結ぶ関係だったが、今川義元にとっては後顧の憂いがないはずはなかったはずだ。野望がない北条氏はともかく、野心家の武田信玄は裏切るか急に一揆が発生するのを防がなければならないはず。だから、私から見ると、「四万五千」という数字は義元が持っている全兵力とし、そのうち「二万五千」の兵を出陣させたと推察される。

(三) 信長出陣までの義元の動き

永禄三年（1560年）五月十日、この日今川義元は万を超す軍勢を先鋒として出陣させた。

先鋒の大將、井伊直盛は今川館の正門である四脚門をくぐり、その前の本通り（東海道）をまっすぐ西に向かって行軍した。

井伊直盛は今川家臣団の中では新参の外様であり、今回の出陣では、新参の外様がどれだけの働きをするか、その忠誠度が試される場でもある。

五月十二日、義元の本隊出陣。先鋒が出陣して一日おいた十二日、義元は自ら譜代家臣と言うべき駿河衆を率いて駿府から出立ちした。今川軍は十二日、藤枝に泊まり、翌十三日には掛川まで進んでいる。

十四日、義元本隊は掛川城から発して袋井・磐田をとおり、天竜川を渡って引馬城に入った。そして翌日、引馬城から出発、三河の吉田城に入った。

五月十六日、吉田城を出発した義元はその日の夕方には岡崎城に入った。

そして、翌十七日義元の本隊が池鯉鮒（ちりゅう）に至り、先鋒は三河と尾張の国境である境川を越えて尾張に侵入している。

五月十八日夜、織田信長は清洲城で軍法会議を開き、籠城か出撃かを決めた。

そして、今川勢の松平元康（後の徳川家康）は十八日の夜、大高城に兵糧を届けた。

ところで、義元の兵力についてのところで述べたが、尾張の三分の一は義元が持っているということから見ると、尾張の東部では今川の色が濃く、西部では織田の色が濃いということになる。

それと、尾張の西部である大高城と鳴海城は以前山口氏の裏切りによって今川勢の城になった。

そして、今川義元の侵攻に対して、信長は大高城と鳴海城の近くに丸根砦・鷲津砦と善照寺砦を建て、両城を包囲したため、元康は、兵糧を大高城へ送りたいなら、夜にしなければならなさそうである。従って翌日十九日、両砦を攻め落とした。

(四) 信長の出陣

五月十九日、午前四時ごろ、信長は丸根・鷲津両砦へ攻撃開始されたとの報を得て、清須城の広間に姿を現し、小姓に鼓を持たせ、小若舞の敦盛を舞った。

「信長公記」には、

此時、信長敦盛の舞を遊ばし候。人間五十年、下天のうちをくらぶれば、夢幻のごとくなり、一度生を得て滅せぬのものあるべきか、と候て螺ふけ、具足よこせと仰せられ、御物具めされ、立ちながら御食を参り、御甲をめし候てご出陣なさる。

とある現代語に訳すと、

この時、信長は「敦盛」の舞を舞った。「人間五十年、下天のうちをくらぶれば夢幻のごとくなり、一度生を得て滅せぬのものあるべきか。」と歌い舞って、「法螺貝をふけ、武具をよこせ」と言い、鎧をつけ、立ったまま食事を取り、兜をかぶって出陣した。

この時従ったのは岩室長門守・長谷川橋介・山口飛弾守・賀藤弥三郎。これら主従六騎、熱田まで三里（一二キロメートル）を一気に駆けた。

辰の刻（朝八時前後）に「上知我麻神社」の前から東を見ると、丸根と鷲津の両砦は陥落したらしく、煙が上がっていた。この時点で信長勢は、騎馬六騎と雑兵二百人ほどであった。

そして、熱田から善照寺砦まで行った。それから、善照寺砦で将兵を集結させ、軍勢を整えて、戦況を見極めた。

「信長公記」には、

「御敵今川義元、四万五千引し、おけはざま山に人馬の休息これあり。」

現代語訳すと、

「敵、今川義元は四万五千の兵を率い、桶狭間山で人馬に休息を与えていた。」

まず、義元が率いた兵の数については、第二章の部分で述べた。そして、「桶狭間山」という言葉についてであるが、実際にはこの地域に「桶狭間山」という山はない。したがって「桶狭間山」というのは「桶狭間の中にある山」と見られている。

信長は戦況を見て、中島へ移動しようとしたところ、「中島への道は両側が深田で足を踏めば動きがとれず、一騎ずつ縦隊で進むしかない。」

そして、「軍勢少数であることを敵方にはっきりと見られてしまい、もってのほかでございます。」と家老衆が信長の馬の轡に取りついて、口々に言った。しかし信長はこれを振り切って中島へ移動した。この時、信長勢は

二千に満たない兵数であったという。

(五) 信長出陣時の義元の動き

ここで再び、義元の動きを見ることにする。

前夜、すなわち十八日、「松平元康」(後の徳川家康)が大高城に兵糧を無事運び入れたことは当然、義元は知っていたと思われる。

そして、十九日朝、側近から明け方に丸根・鷲津を攻め始まったことと、戦況は今川軍圧倒的優位の状態で推移していることの報告がなされ、元康の働きぶりを大いに喜んで満足した。

義元のこの日の狙いは丸根砦・鷲津砦という大高城の付城である織田方の二つの砦を落とし、さらに、丹下砦・善照寺砦・中島砦という鳴海城の付城である三つの砦を落とすことにあった。して、義元自身は大高城に入る予定だったと思われる。

朝八時ごろ、義元は本隊を率い、沓掛城から大高城を目指し出発した。沓掛城から大高城までおよそ二キロメートルで八時に出ても、夕方四時ごろには大高城に入れると計算していたはずである。

したがって、この日の行軍はゆっくりとしたスピードであり、義元本隊は、はじめから前線の実戦に参加するつもりはなかった。

戦いは、三河隊、すなわち松平元康率いる岡崎衆や遠江隊、すなわち掛川城の朝比奈泰朝らにまかせ、みずからは、そのうしろで督励するだけだったのである。

午前十一時ごろ、桶狭間の手前あたりで「丸根砦・鷲津砦陥落！」の知らせが義元のもとに届けられた。その知らせと前後して、織田軍先鋒佐々政次・千秋季忠を討ち取ったという知らせも入った。

沓掛城から大高城に向かった進軍中の義元本隊に、丸に砦・鷲津砦の陥落と信長の先鋒を破ったという知らせが入ったが、義元は、その時点では兵を止めず、先へ進ませた。そして、桶狭間に到着したところで、昼食のため休憩に入った。

(六) 義元、桶狭間の陣は山か谷か

通説では、義元は桶狭間にある「田楽窪」という場所に陣を据えたが、ところへ信長が山から降りてきて、討ち取られた。しかし、この通説は二つの問題がある

- (一) 今川義元はいくつかの大きな戦いの経験があったはず、こんなに低い場所で陣を張るのは信じがたい事である。そして、「窪地」というのは畑だらけであり、侵攻者としてはこのような進軍や撤退などをしにくい場所で、もないであろう。
- (二) 今、皆によく知られている通説は日本陸軍参謀本部の「日本戦史」に書かれているもので、義務教育に採用され教科書に入ったものである。

そして、信長は山から降りたのなら、行軍ルートは中島砦に行かずに迂回をしなければならない。しかし、近年学者たちの研究によって、信長は中島砦へいったことが明らかとなっている。それに、前にも述べたように、家老衆の進言を無視、中島砦へ移動した。

そして、「信長公記」には、

「御敵、今川義元は四万五千率し、おけはざま『山』に、人馬の休息これあり。」

しかし、「信長公記」これも記載されている、

「今川勢は運の尽きた証拠だろうか。桶狭間というところは狭く入り組んで……深い泥田へ逃げ込んだ敵は……」と書かれている。

確かに「桶狭間」と「窪地」のような場所が書かれているが、「桶狭間山」と「窪地」は「桶狭間」の一部である。

そして、「深い泥田へ逃げ込んだ敵は……」これは、義元の本隊が信長に襲撃され、総崩れしたから、もう自ら山から折り逃げて見られる。この「窪地」は義元が逃げ切れなかった、最期の地であり、「田楽窪」という場所である。

(七) 桶狭間の戦い、そして義元の最期

「義元本隊が沓掛城を出て大高城に向かっている」という連絡は、信長が丹下砦か善照寺砦に入ったころ信長の耳にはいったものと思われる。

「信長公記」によると、

義元が「心地はよしと悦で緩々として謡をうたはせ陣を居られ」

現代語訳すると、

義元が「よい心地だと喜んで悠々謡をうたい、陣を据えていた。」

のは、信長の先鋒佐々政次・千秋季忠らをうちと尾田という知らせを得てからである。

つまり、義元は、丸根砦・鷺津砦も落とし、今また信長の先鋒を打ち破ったということで、大い喜んで「休憩にしよう」となったというものと思われる。

したがって、梁田特務機関が「義元が桶狭間山で休憩中」という最も大事なしかも決定的な情報を信長に届けたのは、信長が中島砦に進んだ時点であったと考えられる。

信長はいよいよここで、それまで近臣の誰にもしゃべられなかった秘策を披露することになる。諜報合戦の時代であり、最後の最後まで自分の胸のうちにしまっていたのである。

信長は中島砦から軍を進めようとしたとき、また家老たちが信長に無理にすぎりつき、「これ以上の進軍はあぶのうございます。」と必死になってとめた様子がかがわれる。

信長は、

「敵は昨夜、大高へ兵糧を運び入れ、丸根・鷺津に手を焼き辛勞して疲れている者どもだ。こっちは新手の兵である。」とあって軍を進めた。

そして、信長が「敵の武器など分捕するな、捨ておけ」といったその後すぐ、信長本隊の前衛が今川軍と衝突をし、前田又左衛門（前田利家）・毛利十郎・木下雅楽助・中川金右衛門・佐久間弥太郎・魚住隼人がすでにくびを取ってきた。

これで見ると、中島砦を出た信長は進みながら、警戒になった今川軍と小競り合いを繰り返していたことが確実であり、従来言われてきたように、義元側にまったく気づかれずに義元の本陣に近づいたという状況はかなり違っていた。

常識的に考えれば、今川方の最前衛の一部隊が、信長本隊であることを確認していたかどうかは別として、織田軍の一部隊が桶狭間方面に向かお

うとしていることはキャッチしているのです、すぐ伝令を出してそのことを義元本陣に伝えているはずである。

仮にこの時点で伝令が出されていれば、信長の奇襲は成り立たなくなる。しかし、実際問題として、この時、今川軍前衛から義元に「信長軍接近中！」の知らせはなかった。それはどしてだったのだろうか。

さきに、敵の斥候を捕殺する保全班のようなものが梁田特務機関にあったらしいことを見たが、義元本陣と今川前衛との間に梁田特務機関配下のものがしのんでおり、連絡を絶っていたのではないかと考えられる。

そして、「信長公記」には、

「山際迄御人寄せられ候の処、俄か急雨石を投げ打つ様に、敵の輔（つら）に打付くる。身方は後ろの方に降りかかる」

訳すと、

「山際まで軍勢を寄せた時、激しいにわか雨が石か氷のように降り出した。北西向かって布陣した敵には、雨は敵の顔に降りつけた、味方には後方降りかかった。」

さらに、「桶狭間」というところこのあたり鳴海丘陵地とって、ぎわだって高い山はない代わり、起伏に富んだ地形であった。信長が隠密に行軍できたのはこの三つの要素があったからである。

さて、話を戻す。五月十九日、信長は山際まで行軍した時、前に述べたとおり、急雨が降ってきた。

午後一時ごろ、雨は上がって空が晴れたところ、義元の本陣へ切り込んだ。

通説では、信長はこの悪天候を利用し、山から降りて義元の本陣を襲撃した。

しかし、「信長公記」では、

「空が晴れたのを見て、信長はやりおっ取り、大音声を立てて『それ、書かれ、掛かれ。』とさけぶ。」この点で、雨が降っているときに襲撃ではないとわかった。

そして、襲撃を受けた今川軍は、「信長公記」には、

「水を撒くように後ろへどっと崩れた。……義元の赤塗の輿さえ打ち捨てて崩れ逃げた。」

午後二時ごろ、今川軍は始め300騎ぐらいが丸くなって、義元を込んで退いたが、何度でも引き返され、ついに50騎ほどになった。そして、義元は信長に討ち取られた。

義元が討ち取られた場所は「桶狭間」にある「田楽ヶ窪」と言う「窪地」である。そして、第六章に述べたとおり、義元の本隊が信長に襲撃され、総崩れしたから、もう自ら山から折り逃げていると見られる。この「窪地」は義元が逃げ切れなかった、最期の地であり「田楽ヶ窪」という場所である。

したがって、今通説のとおり信長は山から降りて「窪地」に居た義元を討ち取った。

しかし、通説では今川軍の本陣は「窪地」にあった。いろいろ資料では「窪」ではなく「山」であった。

今川家の実質的な当主の今川義元や松井宗信、久野元宗、井伊直盛、由比正信、一宮宗是、蒲原氏徳などの有力武将を失った今川軍は浮き足立ち、残った諸隊も駿河に向かって後退した。水軍を率いて今川方として参戦していた尾張弥富の土豪、服部友貞は撤退途中に熱田の焼き討ちを企んだが町人の反撃で失敗し、海路敗走した。

大高城を守っていた松平元康（後の徳川家康）も戦場を離れ、大樹寺（松平家菩提寺）に身を寄せるがここも取り囲まれてしまう。前途を悲観した元康は祖先の墓前で切腹し果てようとした。その時、当寺13代住職登誉天室が「厭離穢土 欣求浄土」を説き、元康は切腹を思いとどまった。そして教えを書した旗を立て、寺僧とともに奮戦し郎党を退散させた。以来、元康はこの言葉を馬印として掲げるようになる。こうして元康は今川軍の城代山田景隆が捨てて逃げた岡崎城にたどりついた。

尾張・三河の国境で今川方に就いた諸城は依然として織田方に抵抗したが、織田軍は今川軍を破ったことで勢い付き、6月21日（7月14日）に沓掛城を攻略して近藤景春を敗死に追い込むなど、一帯を一挙に奪還していった。しかし鳴海城は城将・岡部元信以下踏みとどまって頑強に抵抗を続け、ついに落城しなかった。元信は織田信長と交渉し、今川義元的首級と引き換えに開城、駿河に帰る途上三河の刈谷城を攻略し水野信近を討ち取るなどし、義元的首を携えて駿河に帰国したが、信近の兄の水野信元はただちに刈谷城を奪還したうえ、以前に今川に攻略されていた重原城も奪還した。

一連の戦いで西三河から尾張に至る地域から今川氏の勢力が一掃されたうえ、別働隊の先鋒として戦っていたため難を逃れた岡崎の松平元康は今川氏から自立して松平氏の旧領回復を目指し始め、この地方は織田信長と元康の角逐の場となった。しかし元康は義元の後を継いだ今川氏真が義元の仇討の出陣をしないことを理由に今川氏から完全に離反し、永禄5年(1562

年)になって氏真に無断で織田氏と講和した(織徳同盟)。以後、公然と今川氏と敵対して三河の統一を進めていった。また、信長は松平氏との講和によって東から攻められる危険を回避できるようになり、以後美濃の斎藤氏との戦いに専念できるようになり、急速に勢力を拡大させていった。

桶狭間合戦では義元本隊の主力に駿河、遠江の有力武将が多く、これらが多数討たれたこともあり今川領国の動揺と信長の台頭は地域情勢に多大な影響を及ぼした。甲相駿三国同盟の一角である今川家の当主が討ち取られたことで、北条家武田家と敵対する勢力、とりわけ越後の長尾景虎(上杉謙信)を大きく勢い付かせることとなり、太田資正や勝沼信元らが反乱を起こすなど関東諸侯の多くが謙信に与し、小田原城の戦いや第四次川中島の戦いに繋がっていった。さらに甲斐の武田氏と今川氏は関係が悪化し、永禄11年末には同盟は手切れとなり、武田氏による駿河今川領国への侵攻(駿河侵攻)が開始される。信長と武田氏は永禄初年頃から外交関係を持っており武田氏は同盟相手である今川氏の主敵であった信長と距離を保っていたものの永禄8年頃には信長養女が信玄世子の勝頼に嫁いでいるなど関係は良好で、以後信長と武田氏の関係は同盟関係に近いものとして、武田氏の西上作戦で関係が手切れとなるまで地域情勢に影響を及ぼした。

第八章：結論

通説では今川義元「桶狭間」に布陣した場所は「田楽『窪』」というので、研究者たちと「信長公記」では「桶狭間『山』」と言うところだった。

一方、織田信長の進軍ルートでは「中島砦」へ行かずに迂回だったが、研究者と「信長公記」には明らかに迂回ルートではなかった。

そして、信長は天候が悪いとき山から降りて義元の本陣を襲撃した。しかし、「信長公記」では、「空が晴れたのを見て」この点で信長は雨がやんだ後義元の本陣を襲撃した。

今までの通説では、「日本陸軍参謀本部」の「日本戦史」に書かれたものであり、義務教育に採用されたものである。

そして、研究者たちによる色々新説が出てので、私から見るとこれを書いた方は歴史を研究せずか自分の観点に書かれたものではなかろうか。以後も研究者たちによって色々な説が出るだろう。

参考文献

小豆坂の戦い-wiki

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E8%B1%86%E5%9D%82%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84>

桶狭間の戦い-WIKI

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A1%B6%E7%8B%AD%E9%96%93%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84>

桶狭間の戦い

作者：小和田哲男

文庫：254 ページ

出版社：学習研究社（2000/09）

言語：日本語

ISBN-10：4059010014

ISBN-13：978-4059010012

発売日：2000/09

甲陽軍鑑(教育社新書-現代語訳)

腰原哲郎訳

- 新書：297 ページ
- 出版社：教育社（1979/09）
- 言語：日本語
- ISBN-10：4315400858
- ISBN-13：978-4315400854
- 発売日：1979/09

信長公記-現代語訳

作者：太田牛一

翻訳：中川太古

- 文庫：541 ページ
- 出版社：中経出版（2013/10/10）
- 言語：日本語
- ISBN-10：4046000015
- ISBN-13：978-4046000019
- 発売日：2013/10/10

今川氏研究の最前線（歴史新書 y）

- 日本史史料研究会（監修），大石 泰史（編集）

- 新書：287 ページ
- 出版社：洋泉社（2017/6/2）
- 言語：日本語
- ISBN-10：4800312639
- ISBN-13：978-4800312631
- 発売日：2017/6/2